平成２３年度第１回滋賀県立琵琶湖博物館協議会の開催結果概要

１　日　時：　平成２３年９月２日（金）　１３：３０～１６：００

２　場　所：　琵琶湖博物館セミナー室

３　出席委員：津屋委員、青木委員、伴委員、西川委員、西委員、村井委員、山本委員、吉井委員、長束委員（以上９名）

４　博物館出席者：篠原（館長）、兼房（副館長）、用田、高橋、グライガ―、村井、桑原、楠岡、山川、芳賀、亀田、上田

５　傍聴者：５名

■　開　会

○司会（兼房副館長）：定刻になりましたので、 ただいまから、本年度最初でございますけれども、「滋賀県立琵琶湖博物館協議会」を開催させていただきます。

委員の皆様におかれましては大変忙しい中、またご遠方、ましてや台風が近づいているという悪天候の中、お越しいただきまして、まことにありがとうございます。

本日の司会進行を務めさせていただきます当館副館長の兼房でございます。どうぞよろしくお願いします。

あらかじめお断りをしておきたいのですが、当協議会は県の条例に基づきまして設置しております会議でございまして、こういった会議等につきましては、公開という形で進めさせていただいております。したがいまして、傍聴席、記者席等設けまして、一般に広く知っていただくという形をとっておりますので、ご了承いただきたいと思います。

この会議は、条例によりますと、定数の半数以上で会議が成立することになってございます。１５名の委員のうち、９名のご出席をいただいております。したがいまして、当会議が成立していることをご報告申し上げます。

それでは、会議に入ります前に、篠原館長よりごあいさつを申し上げます。

■　あいさつ

○篠原館長：琵琶湖博物館の館長の篠原です。どうも皆様ご参集いただきましてありがとうございます。２３年度第１回の琵琶湖博物館協議会の開催に当たりまして、一言ごあ

いさつ申し上げます。

会議次第を見ていただきますとわかりますけれども、こういうのは普通にやると大体紋切り型になるのですけども、今回は、おやっと思われると思います。――企画展示の観覧をしていただきまして、琵琶湖博物館の運営状況について、ここで報告したことを、皆さんがこれはおかしいんじゃないか、こうだ、ああだと言っていただくわけですが、――今回は「展示の本格的更新について」ということがあります。実は、内部的ですけれども、リニューアルを目指して当館がこれから動こうとしております。これを皆さんのところでお諮りすることになるのですけれども、まだまだ諮る段階ではありません。

ただし、皆さんが持っている知恵とか、そういうものを私どものほうにいただきたいと思うので、これからどういうことをしていったらいいか、何を考えなくてはならないのかということで、我々のほうがそれを利用させていただきまして、どういうリニューアルを考えたらいいのかという、それをメインテーマにしていただきたいというふうに献立をつくりました。よろしくお願いしたいと思います。

きょうは、帰れるかどうか、どうなるか知りませんが、十分時間をとっていただいて、まず初めに企画展示の観覧、「こまった！カワウ　－生きものとのつきあい方－」「レッドリストの魚たち」２つ見ていただきます。これも十分な時間はとれませんけれども、「こまった！カワウ」というのは、カワウのことを長い間研究されてきた人たちが中心になって出しております。だれが困ったのかをよく見ていただきたいと思いますけれども、社会的な問題も含めて、十分見ていただきたいと思います。

企画展示の観覧から始まって、議事という形になると思いますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

■委員および博物館出席者の紹介

○司会（兼房副館長）：それでは、当協議会は昨年の９月に委員の委嘱替えをさせていただきまして、今回は２回目ということではございますけれども、初めてお顔を合わせていただく方もおられますので、私のほうからお一人ずつご紹介をさせていただきたいと思います。

まず、公益財団法人東京動物園協会、そして葛西臨海水族園の園長さんでいらっしゃいます西委員でございます。

〇西会長：西でございます。よろしくお願いします。

〇司会（兼房副館長）：西委員におかれましては、この協議会の会長を務めていただくことになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

　それから、向かって右手の方でございますけれども、東邦大学理学部の教授でいらっしゃいます西川委員でございます。

〇西川委員：西川でございます。よろしくお願いいたします。

〇司会（兼房副館長）：それから、滋賀県立大学環境科学部の教授でいらっしゃる伴委員でございます。

〇伴委員：伴修平と申します。

〇司会（兼房副館長）：それから、有限会社グリーンウォーカークラブ・ネイチャーガイド研究所の代表取締役でいらっしゃいます青木委員でございます。

〇青木委員：青木です。よろしくお願いします。

〇司会（兼房副館長）：それから、有限会社プランニング・ラボ代表取締役の村井委員でございます。

〇村井委員：村井でございます。よろしくお願いいたします。

〇司会（兼房副館長）：滋賀次世代文化芸術センター　副代表の津屋委員でございます。

〇津屋委員：津屋でございます。よろしくお願いいたします。

〇司会（兼房副館長）：それから、公募委員としてお二方いらっしゃいまして、吉井委員でございます。

〇吉井委員：吉井です。よろしくお願いします。

〇司会（兼房副館長）：それから、長束委員でございます。

〇長束委員：長束です。よろしくお願いいたします。

〇司会（兼房副館長）：それから、滋賀県脊髄損傷者協会副理事長でいらっしゃる山本委員でございます。

〇山本委員：山本です。よろしくお願いします。

〇司会（兼房副館長）：それと、パナソニック株式会社の方から委員として出ていただいています沢田委員は、きょうは欠席でございます。沢田委員の代理ということでご推薦いただきまして、廣畑さんがお越しいただきました。オブザーバーという形で本日同席していただくことになりますので、よろしくお願いします。

○廣畑氏：よろしくお願いします。

○司会（兼房副館長）：それから、私どものほうでございますけども、先ほどあいさつ申し上げました篠原館長でございます。その隣が、用田上席総括学芸員でございます。高橋上席総括学芸員でございます。グライガー上席総括学芸員でございます。八尋総括学芸員兼研究部長でございます。松田総括学芸員兼事業部長でございます。総括学芸員兼企画調整課長の桑原でございます。

それから、私どもの後ろにおりますのが、各ＧＬ、グループリーダーでございますけれども、総務課長の村井でございます。展示担当グループリーダーの芳賀専門学芸員でございます。資料活用担当グループリーダーの山川専門学芸員。交流担当グループリーダーの楠岡専門学芸員でございます。

以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

■開催中の企画展示の観覧

・第１９回企画展示「こまった！カワウ　－生きものとのつきあい方－」

・第２４回水族企画展示「レッドリストの魚たち」

■　議　事

○司会（兼房副館長）：　それでは、議題に入ってまいりたいと思います。

本協議会は、条例によりますと、議事進行につきましては会長の方にお願いすることになってございます。

西会長、よろしくお願いいたします。

（１）琵琶湖博物館の運営状況について（報告）

○西会長：それでは、議事に入らせていただきたいと思います。

まず１つ目は、「琵琶湖博物館の運営状況について」、最初に事務局の方から説明をお願いします。

○事務局（兼房副館長兼総務部長）：時間の都合上、それぞれの部で５分ごとということで考えております。慌ただしくなりますが、ご了解いただきたいと思います。

お手元に、平成２３年度第１回琵琶湖博物館協議会資料というＡ４のつづりがあると

思います。それの３ページに、総務部関係と書いてございます。そして、５ページで、入館者数の年次推移を概観していただこうと思っております。左手のほうに数値が置いてございまして、平成８年度の１０月に当館が開館されまして、それから１５年間、平成２２年度・昨年度末で３６万人ということでございました。

グラフを見ていただきますとわかりますように、ピークの９年度からずっと漸減しておりまして、5年前の１７年度、１８年度で少し上回った時期がございました。これは、白いビワコナマズが捕獲できて、展示をさせていただきましたところ人気を得まして、２年ほど若干上がったということがございますが、それ以降、４年間減少し続けているというのが実態でございます。

次の６ページで、過去１０年間の入館者数の推移を落としてございます。上の段がジャンル別、つまり幼稚園であったり、小中であったり、高校生、大学生であったりといったジャンル別シェアを落としてございます。左手が個人、右手が団体という形で分けておりまして、それぞれのジャンルを示してございます。

一番右手のほうをご覧いただきますと、個人と団体の割合を落としてございます。昨年度末におきましては、個人が６７．８、団体が３２．２、ほぼ２対１の割合で、やはり個人のほうが多いという状態でございます。

それから左手、個人の小中を見ていただきますと、約４万人ということで、１０年前から余り変動がございません。年齢によってばらつきはございますけど、４万人前後で推移をしてございます。一方、個人の一般でございますけれども、１６万人ということで、全体に占める割合は４４．５％ということで、高い率を示してございます。

右手、団体の小中を見ていただきますと、5万9,０００強ということで、5年ぐらい前から学校行事での入館者数が縮小してございます。例えば、１２年度の７万7,０００強が、１７年度に７万2,０００になり、２２年度に6万6,０００ということで、大幅といってもいいぐらい減ってきております。少子化もさることながら、学校現場でも、いわゆる価値観の多様化といったことが反映されているのかなというふうに思っております。それと、団体の一般でございますけれども、3万6,０００強ということで、１０年前と比べますと、３分の１まで減っているという状況にございます。言いかえれば、ちょっと見飽きられたということかなとも思っております。

下の表は、ジャンル別の入館者数の対前年伸び率を示してございますが、右手の方か

ら２つ目、２２年度の実績が３６万ということで、１０年前から比べますと３０％減、７割になってしまったという状況でございます。その右は、対前年の伸び率を示してございますが、やはり４年間減少し続けておりまして、５％から８％ぐらいで毎年減少しているというのが実態でございます。

次の７ページは、その数値をグラフで落としてございます。中ほどのグラフで、左が一般の部、右が小中の部ということで、太い方が団体、細い方が個人ですけども、一般の部では団体が極端に下がってきてございます。一方、小中の部では一般よりも団体の方が多い、けれども減ってきているという実態が浮かんでいます。

それから、１０ページをご覧いただきたいと思います。これは当博物館の予算の推移でございます。上段が当初予算の総計でございまして、当然平成８年度の建設当時から比べますとだんだん落ちてございます。とりわけ、中段の一般財源ですけれども、だんだんと縮小されつつあるということで、県の財政事情が顕著に出ているという実態でございます。

１１ページは、当年度の琵琶湖博物館広報・経営戦略会議行動計画でございます。以前から、当会議でご指摘を賜っておりまして、広報のあり方等々についてご意見を賜っております。そういったところを反映した行動計画をつくったところでございます。

以下、１３、１４ページにつきましては、この１年間の記者発表の資料提供した実績、１５ページ以降につきましては、テレビ、ラジオ、新聞等々によります私どもの方から出た資料提供の結果でございます。

急いで申しわけございません、２５ページをご覧いただきたいと思います。当館では定例的にアンケートをとってございます。回収実績は大きなものではございませんけれども、そこに紙面整理をしてございます。２５ページの一番上段が来館の回数であります。３層になっていますが、白い部分が直近のデータでございます。「はじめて」というところが、例えば白い部分のグラフを見ていただきますと３３％、「４回目以上」という白い部分は４０．３％ということです。要するに、初めての方は３分の１以上占めますが、いわゆるリピーターといわれる方で、４回以上が最も多いというのが当館の特徴でございます

それから、２６ページの２段目のグラフは、満足度でございます。左から「非常に満足した」「満足した」「ふつう」とあるわけですけども、「非常に満足した」あるいは

「満足した」を合わせまして８０％を超えるということで、当館にお越しいただいた皆さんには満足していただいているという理解をしております。一方、「不満」というところでございます。これも当協議会で何度か議論していただいておりますけれども、駐車場の問題であったり、レストランの問題であったり、あるいは昼食場所であったりというのが、やっぱり高い状況でございます。とは言いますものの、徐々に年々減ってきているというのもまた確かなことでございます。

以上、端折って申しわけございませんが、総務部からの報告にかえさせていただきます。続いて、事業部のほうから報告いたします。

○事務局（松田事業部長）：それでは、事業部のほうから報告させていただきます。

まず、３１ページでございます。昨年度、第１８回企画展示といたしまして、「湖底探検　～びわ湖の底はどんな世界？～」を２０１０年７月１７日から１１月２３日に開催させていただいております。こちらは琵琶湖の深層部の環境、生物を紹介し、そこが琵琶湖の生態系にとって重要な場所であることを紹介したものでございます。

続いて３２ページ、企画展の関連シンポジウムといたしまして、「湖底遺跡の探検　～湖に沈んだ村を科学する～」を、８月２８日に開催させていただいております。

続いて３５ページは、昨年度のギャラリー展示の実施概要でございます。２）の「神秘の鍾乳洞　河内の風穴」は、昨年度ご見学いただいたものでございます。３）の「近江のふるさと絵屏風と未来予想絵図」、４）の「温故知新・近江の糸と織り」、３６ページ、５）の食事（くいじ）博」につきましては、昨年度開催させていただきましたギャラリー展示ということになります。

それから、ギャラリー展示とは少し違って、昨年度は国際生物多様性年ということで、名古屋でもＣＯＰ１０が開催されましたが、それに関連いたしまして、流域連携企画といたしまして、「守ろう！琵琶湖・淀川水系の魚たち」を水族企画展示室のほうで開催させていただいております。それから、これに関連するシンポジウムも５月２２日に開催させていただいております。

３９ページは、先ほどご覧になっていただきました今年度の企画展「こまった！カワウ」について紹介させていただいております。

続いて４１ページに、２０１０年度の資料の整備・活用状況につきまして、表にまと

めてございますので、ご覧になっていただければと思います。

駆け足で申しわけございませんが、４９ページは、２０１０年度の琵琶湖博物館特別講演会の実施状況についてまとめたものでございます。トータルで８６０名の方にご参加いただいた講演会となっております。

それから、５１ページは、「あさ、ひる、ばん　博物館を楽しもう！」の実績の報告が入ってございます。これにつきましては、後ほど交流担当のグループリーダーからご紹介させていただきます。

それから、チラシが続きまして、資料１２と右肩に書いたもので、「節電クールライフキャンペーン」というのがございます。７月２１日から８月１１日まで開催させていただきまして、多くの方々にご来館いただいたという実績がございます。

５６ページに、その実績の数値が載ってございます。平成２３年度の期間中の来館者数は４万１，２８１名と、２２年度に比べまして増加しているのがおわかりいただけると思います。

続いて、５９ページでございますが、２０１１年度の交流事業の計画および８月末までの実施状況について紹介させていただいております。

駆け足で申しわけございませんでしたが、以上で事業部の報告とさせていただきます。

それでは、交流のグループリーダーのほうから、「あさ、ひる、ばん　博物館を楽しもう！」のご紹介をさせていただきます。

○事務局（楠岡交流担当ＧＬ）：交流担当の楠岡と申します。

「あさ、ひる、ばん　博物館を楽しもう！」というイベントについて報告させていただきます。このイベントのパンフレットですけれど、位置づけとしては、「琵琶湖の日」制定３０周年記念、それから、はしかけ制定の１０周年記念、それから、琵琶湖博物館開館１５周年記念という位置づけです。

このイベントを行った目的としましては、先ほどありましたけど、入館者が減っているということで、新たな客層を開拓できないかということと、あと、琵琶湖博物館には「はしかけ」制度というのがありますけど、各「はしかけ」グループの参加者が、ほかの「はしかけ」は何をやっているのかよくわからないということで、交流の場になったらいいなというふうに考えて、このイベントを開催しました。

まず、アトリウムに特設ステージを設けました。エフエム滋賀と提携しまして、ライブ放送をしております。それで、館長も出演しております。それから、プロの演奏家によるイブニングコンサートとか、あと、ブラジル人のための学校がありまして、そこの生徒さんにサンバの演技をしていただくとか、小学生による狂言、それから、各種アマチュアの団体による演奏会など行いました。あと、水族のバックヤードツアーをやりました。

もう一つの目玉としては、ナイトミュージアムというのを開催しています。これは、水族展示の照明を落としまして、通常昼間は見られない魚の行動なり何なりを見ていただけたらというイベントです。これは大ナマズの水槽ですけど、昼間ですと、下のほうにじっとしている大ナマズが、このように上のほうで泳いでいる光景が見られました。

あと、屋外展示で、夜の昆虫の観察とか、アストロパーク天究館の協力によって、天体観測もしました。ただ、この日はあいにく曇りで星が余り見えませんでしたので、天究館の高橋さんによる星の講演をしていただきました。

はしかけオープンハウスというのも開催しております。これは、「はしかけ」グループがそれぞれブースを持ちまして、それぞれの活動を紹介するというものです。一般のお客さんにスタンプラリーの台紙を渡しまして、それぞれのブースを回るとスタンプが押せると。それで景品などもお配りしました。

これは、「ほねほねくらぶ」がクマの骨格標本をつくるのをエントランスでやるとか、これは「田んぼのはしかけ」です。それから植物です。

それから、里山の会で、参加者に自分でハンモックをつくってもらって、それで屋外展示でハンモックをつるして昼寝をしてもらうと。これも里山の会ですけれど、粘土でペンダントをつくるということで、吉井委員さんにも参加していただいております。

それから、これは、「たんさいぼうの会」で、珪藻という植物プランクトンを使って、このように福笑いをつくってもらう。それから、これは「びわたん」というグループですけれど、琵琶湖の模型づくり。あと、フィールドレポーターさんにもブースを出していただいておりまして、植物で遊ぼうという活動をしました。

あと、エントランスの風景ですけど、このように非常に多くのお客さんに来ていただいています。特に３日目にはごった返しました。その要因の一つとして、隣の芝生広場で青年会議所主催の「さかなクン」のトークショーというのがありまして、４，０００

人と聞いておりますけど、このようなたくさんの方が来られまして、その多くの方が琵琶湖博物館の方にも回ってこられたのではないかと想像しております。

そうしますと、烏丸半島周辺でこのような渋滞が起きまして、これは副館長ですけど、手の空いた職員全員が駆り出されて、駐車場なり交通整理をするというようなハプニングも起こりました。

このイベントの数字ですけれど、初日の来館者数が３，０００人、２日目に７，８００人、３日目に１万１，３００人ということで、３日合わせて２万２，０００人の来館者がありました。１日に１万人を超えるというのは、オープンしてから最初の一、二年以来１０何年ぶりに起こったことです。時間帯を見ますと、夜の５時から９時までオープンしたんですけれど、初日は半分程度の方が５時以降に入っています。ただ、２日目、３日目になりますと、そのパーセンテージが減りました。

それで、アンケート調査を行いましたけれど、来館の回数は半分の方が４回以上ということで、当初この目的として新たな客層を開拓しようと思って、１回目の人が増えるかなと考えたんですけれど、ふたをあけてみると、通常のアンケート調査に比べて、かえって１回目の方が減っていて、常連が増えているという結果になりました。それから、満足度に関しては通常と同じで、大体７５％以上の方が満足しているということです。それで、お住まいは滋賀県が中心でした。

情報源としまして、琵琶湖博物館の特徴として、通常ですと口コミ、友人、知人、家族というのが一番多いんですけど、今回はチラシを琵琶湖博物館でも配りましたし、青年会議所のほうでも県内の全小学生に配るなどしまして、チラシ、ポスターを見てこのイベントに参加したという方が圧倒的に多い数でした。

このイベントから明らかになったことは、琵琶湖博物館にはまだ１万人のお客様を呼べるポテンシャルがあるということがわかりましたので、今後、工夫次第ではまだまだお客さんが呼べるのではないかと考えています。

以上です。

○事務局（八尋研究部長）：最後に、研究部関係のご説明をいたします。６１ページからになります。

６３ページから６７ページまで、２０１０年度の研究実績の一覧です。これは資料を見ていただければと思います。６９ページについては２０１１年度の総合研究、共同研

究、申請専門研究、専門研究の一覧です。７１ページは、資料１６、研究セミナーの一覧となっています。今年度の上半期分です。

それで、７３ページの資料１７、これは今年度の科学研究費補助金の採択、いわゆる科研費の採択の一覧です。博物館では組織的に外部資金の獲得に努めてまいりました。それで、今年度新たに９件を申請しまして、上の表に新規と書かれてありますが、そのうち４件が採択されております。採択率は４割を超えておりまして、全国平均が３割弱ぐらいですので、かなり高い数値を維持しております。継続も合わせて１７件採択されておりますが、頑張って研究外部資金の獲得に努めているということを、ここでは紹介しておきたいと思います。

最後の７５ページですが、研究発信の一つとしまして、連続講座を今年度も実施しようと考えています。これは昨年度、一昨年度から新琵琶湖学入門セミナー、新琵琶湖創造セミナーといった形で継続してやっているもので、定員７０名ですが、ほぼ満員状態、申し込みを締め切らないといけないぐらい好評なので、今年度も１月と３月の土曜日にやっていこうと考えております。

研究部からは以上です。

○西会長：どうもありがとうございました。

余り時間がないというか、本当は休憩に入る時間なんですが、今発表されたことで、どうしても訊いておきたいとか、意見を言いたいという方――休憩した後、もう一つの議題の「展示の本格的な更新について」の説明後、今お話しいただいたことを含めてご意見をお伺いしようかと思いますけども――今聞いたことで、あるいは先ほどご覧ごいただいた企画展のことで、ご意見いただきたいと思います。いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

○村井委員：今回の協議会の目的は、こうしたあっさりした報告を受けるだけでよかったんでしょうか。

毎年、こういう内容だったでしょうか。

○西会長：はい、どうぞ。

○事務局（兼房副館長）：委員ご指摘のとおり、本来、この報告を十分な時間をとってさせていただいて、これに伴うご意見をちょうだいしたいということで運んでまいりまし

た。

冒頭、館長が申し上げましたとおり、実は今回、展示の本格更新ということに時間を十分とりたいという私どもの思いがありまして、（運営状況報告に対する）ご質問がもしあれば、（次の議題）そのときにあわせてしていただければと思って、端折ってやらせてもらっているというのが本音のところでございます。

○村井委員：館側から大きな方針だけでも伺いたい。今年度の事業方針は立ててらっしゃると思うので、それをある程度インプットしていただかないと、きょう見た展覧会のことについても意見を申し上げづらい。

あと、毎年つくってらっしゃる中長期のＡ３の一覧表で今年度目標値も確認したいのに、それも用意されていないというのは、幾ら後半のほうが重要といっても、端折り過ぎじゃないかと思います。

○事務局（兼房副館長）：ご指摘のとおりでございます。この中長期基本計画に基づきまして、今年度から２７年度までが第３期、最終の期間になります。それは行動計画を単年度ごとに決めておりまして、従いまして、２０１１年度も行動計画表をつくってございます。

先に委員さんの方にこれをお示しして、ご覧いただこうと思っておったのですけれども、基本的には２２年度からプラスアルファのものが、今の展示更新に関わる部分になってまいりますので、後ほどの議題のときにご議論いただくことでご理解いただけるというふうに理解しておりました。

そもそも、この計画そのものの流れというのは、「だれでも・どこでも博物館」ということで、平成２７年度にそれを達成できるような目標を立ててきてございます。この３期計画につきましては、それを具体化する、一歩出るというような形でありますけれども、行動計画そのものの中には個別具体的なことを示してございませんので、昨年の計画の中の案のところでお示ししたとおりに進んでいるというふうにご理解いただければいいと思います。

○村井委員：前回欠席したので、そのときにそういうお話も皆さんは受けてらっしゃるんですか。

○西会長：受けはしましたけども、今それをここで思い出しながら、３人の方の説明を聞くというのはちょっと難しいので、村井委員が言われたように、そういう資料を見なが

ら今の報告を聞かせていただければ、より的確な話ができたんじゃないかなというのはごもっともだと思いますので、次回に、そういうことを反映させていただければと思います。

○事務局（兼房副館長）：わかりました。

○西会長：よろしいでしょうか。

毎年きっちりした年次計画とか、それから中期計画を立てておられて、その中でどういうふうに位置づけられているかというのを見ながら、やるほうが的確な話ができるんじゃないかなと思います。

はい、どうぞ。

○津屋委員：そういった中では、前の前の会議でも入館者数がすごく減っていて、委員の皆さんからかなり具体的な問題点が出てきて、その中で、結構シビアなせめぎ合いというか、できる、できないとかということもあった中で、先ほどの楠岡学芸員さんの話は極めて光が差しているというか。

ただ、それをあっさりと事業報告という形だったので、なぜ大成功を収めたのかという中に、何か抜け道的な答えがあるのかなと思います。すごく大事な大成功例という。でも、これが１回で終わるのか。多分、過去もナイトミュージアムをされていましたよね。これが初めてのプランではなくて、前のときと何が違って、こんなにヒットしたんだろうと。単に、さかなクンがいたからということではないと思うんですね。

これまでどん詰まっていた何かがすぽんと抜けたんだけど、物すごい努力をされた背景がそこにある。そこを聞かせていただけると、３日間で２万人来たら、どんと落ちていた数字が一気に、ことしは昨年よりクリアするなというような感じがするんですけど、そこに、もうちょっと伝えたい背景というか。

○事務局（兼房副館長）：ちょっと事業部長から補足してもらいますけれども、かつてナイトミュージアムをやったときは、催し物的ではなくて、オープンする時間帯を延長したというふうに聞いております。残念ながら、そのときは入館者数も少なかったやに聞いておりますが、今回はそれだけではなくて、今ほどスライドで紹介しましたとおり、いろんな催し物を取り組んでセッティングしたことによって、来ていただいたということもあります。

それから、金土日の３日間かけて、お父さんお母さんが仕事を終えられて来ていただ

けるという機会をとらえて、イベントを催すことによって子どもたちと一緒に来ようと、あるいは子どもたちが親を連れてこようというのが功を奏したのかなというふうに思っています。

事業部、何かありましたら。

○事務局（松田事業部長）：今、副館長から申し上げましたように、今回いろんなイベントがあったというのが大きかったように思います。それから、ラジオを利用いたしまして、かなり事前から広報されていた、広報力の違いというも出たのではないかなというふうに考えております。

○吉井委員：私、参加して感じたのは、それ以外に参加費が要らないというか、駐車料金が要らない、入館料が要らない。「ただ」だったというのは結構大きいんじゃないかなと感じました。

というのは、ここへ来るには駐車場へとめるか、バスで来るかしかなくて、入るのにもお金が要る。そこがフリーだったというのはすごく大きな、得したという気分になったんじゃないかなという気がしました。

○西会長：それは大きいですね。

○篠原館長：それについては県の方針というのがあって、近代美術館なんかもみんなやったんですけども、入館者増に関して分析的に言ってないのは、ここだけの特徴ではなくて、一番多く入館者増があったのは近代美術館なんだそうで、ここでは余り強調できないといいますか、そういうこともあるらしい。

○事務局（兼房副館長）：それは、クールライフ。

○篠原館長：クールライフか、間違えました。

○事務局（兼房副館長）：今申し上げましたのは、クールライフということです。ご家庭でクーラーを使わずに、公共の施設にご家族で来てくださいと。私どもの方で観覧を楽しんでくださいと言うことによって、節電に結びつくであろうというキャンペーンが展開されました。それが、私ども琵琶湖博物館であり、美術館であり、陶芸の森であり、６館が県立で一緒にやったということでございます。それも無料ということでやりました。

先ほどの「あさ、ひる、ばん」ですけど、言うのを忘れていましたけど、確かに無料でございまして、当然それは大きな原因の一つになります。

○村井委員：もう少し意気込みをお聞きしたいんです。今回のイベントにしても、琵琶湖博物館のポテンシャル、ここにどのくらいの可能性があるのかを知るために、あるいはチャレンジするためにやってみたんだとか、そういうような話を私たちは聞きたいんです。していただけませんか。

○篠原館長：奥ゆかしいもんですから、なかなか自慢はできないんですけれども、そういうことは考えているんですが、まだ十分な分析ができていないというのが一つですね。ですから、今回初めてやったことはたくさんありますけれども、これが一般的に言えることかどうかというのは、これから確認をとりつつやっていくつもりです。

２回目はもう少しいけると思いますけど、私も新米館長でまだ１年半ですから、その辺はご容赦願って、どういうふうにこれからやっていくかということは少し考えさせていただきますけれども、とりあえずいろんなことにチャレンジしているということだけは確かです。

○西会長：その「あさ、ひる、ばん」で、いろんなことをやられた中で、何が一番効果的であったかとか、あるいは今までやらなかったものの中で、こういうことが新しくわかったとか、そういう点があったらぜひ聞かせていただきたいと思います。

○篠原館長：一つだけ言いますと、わかったことというのは、「あさ、ひる、ばん」のときとか、今でもただにするときに、「こまった！カワウ」は有料だったんです。ただと言っといて、ここへ来たら、特別展についてはお金をとるということだと、やっぱりまずいなと。どうせするなら、両方ただにしないといけないというのがわかりました。

ですから、せっかく研究に基づいたいい展示をしているけれども、今回の「こまった！カワウ」は、そういう意味ではちょっと不幸な目に遭って、逆のあおりを食っちゃったんですね。要するに、無料のときに、両方無料だったらよかったんですけれど、思った以上に人は入っていないという状況が、そのクールライフのときにありました。そういうことは、いろいろわかるんですけれども、何せ、今いろんなことをやっているので、少し考えさせていただきたいという段階です。

○西会長：担当の方とか。

○事務局（楠岡専門学芸員）：「あさ、ひる、ばん」の分析は現在進行中でして、まだ完全な結果はわかっていないんですけれども、先ほど申したように、約半分の方が４回以上来られている方ということで、過去に琵琶湖博物館に何回か来ているけれど、最近余

り足を運んで来られていなかった方が、琵琶湖博物館でこんなことをやってるんだな、もう一回行こうというふうに思われて来られた方が多いのではないかなと思ったんです。

あと、「はしかけ」グループで、「はしかけ」さんがそれぞれの活動を紹介していますので、その「はしかけ」さんによる口コミということで、広くいろいろな方が来られたと。あと、無料ということも当然ありますし、それから三日目には隣のイベントもあったので、いろんな要素が複合して、これだけのお客さんが来られたんだなと。

〇西会長：どうもありがとうございました。少し話が深まったのかなと思います。

（２）展示の本格的更新について

〇西会長：それでは、次の議題に入りたいと思います。

議事の２番目、「展示の本格的更新について」ということで、事務局の方からご説明いただければと思います。

〇事務局（兼房副館長）：お手元の方にＡ４の横版で新琵琶湖博物館の創造（案）をお示ししていると思います。

冒頭、申し上げましたとおり、この琵琶湖博物館につきましては、館長のあいさつにもありましたけども、５年後に何とか展示の更新、全面リニューアルができないかというのが私ども琵琶湖博物館の熱い思いであります。

まさに、この２３年度が先ほど申しました中長期計画の行動計画の残り５カ年間の最終ということでございまして、その最終計画の期間を新琵琶湖博物館の創造の期間ということに当てまして、開館２０周年目に当たります平成２８年度にはリニューアルした形でオープンできないかというようなことで実は考えております。考えておりますというよりは、考え始めたというのが本当のところでございます。

したがいまして、ここにお示ししました資料につきましては、まだオーソライズされているものでもございません。私どもの思いをここにつづらせていただきまして、委員さんの方から忌憚のない意見をお聴きしたいという思いで作成したものでございます。

１ページ目につきましては、先ほど入館者の状況のところで申し上げたとおりでございます。上段についてはその傾向を示してございます。ただ、下の方に、内外的な環境ということで懸念される事項がございます。

その一つが、来年の春には２００万人動員がされるというふうに聞いておりますオリ

ックス京都水族館が開設されると。中でも、淡水部分ができるという話を聞いております。言ってみれば、競争相手が増えるということになります。

また一方、内部的な話におけますと、現在の施設設備も１５年経過いたしまして、非常に老朽化が進んでございます。いわゆる基幹設備につきましても、あちこち傷んできているというのが実態でございますし、効果的、効率的な施設運営ができない状況にも少しなりつつございます。そういったところで費用が増大しているというのも実態でございます。

もう一つは、本館の基本理念、ご承知いただいていると思いますが、湖と人間というテーマを持った博物館、それから、フィールドへのいざないとなる博物館、そして、交流の場としての博物館、この３本柱があるわけですけども、まさに交流の場である博物館、一生懸命活動をしておりますし、またいろんな取り組み、活動については非常に人気を得ておりまして、それに対する入館者数は増大しつつあるというふうに思っておりますが、いかんせん、交流活動の場としてはスペース的には限界が来ている、あるいは体制も限界に来ているというのが実態で、そういった課題、懸念があるということでございます。

それに対してどうするかということが、次の見開きでございますけども、２つございます。どういう取り組みでそれを解決していくのかということの骨組みでございますけれども、一つが交流機能の拡充ということでございます。交流の場としての博物館の完成に向けて、現在「はしかけ」とかフィールドレポートを一生懸命やってきておりますけれども、それのもう一歩進んだ高度化であるとか、あるいは環境に熱心な企業、大学生、団塊の世代とか、子育て自主グループなどが、とりわけ琵琶湖の自然とか歴史、文化、あるいは暮らしといったものについて、活動・交流できる場の提供であるとか、側面支援できる体制を整える必要があるんじゃないかというところです。

ついては、交流活動組織の充実が必要であろうと。これは２４・２５年と書いておりますが、私どもの今のところの勝手な考え方でございますけども、平成２４年度につきましては、今行っております例えば交流のシステムであったり、はしかけ、フィールドレポーターの取り組みであったり、環境学習、交流機能、こういったものをどのように拡大していくのかという基本計画をつくってみたいということが来年度の計画でございます。

その上で、翌２５年度には、センター機能と交流機能を充実させる体制そのもの、あるいは施設整備そのもの、これは物的、空間的な話でございますけども、整備の必要性を考えていく必要があるんじゃないかなと。あわせて、そのときには博物館の知的アミューズメント機能も強化できるような方向性を、ここで何とか考えていけないかなというのが、先ほどの交流活動組織の充実であります。

もう一つは、来年度の交流事業の展開ということで、ことし非常に好評を得ました「あさ、ひる、ばん　博物館を楽しもう！」といった、その次のパート２という形で実施していけないかという思いをここで挙げております。たまたま今は、開設以来でございますけども、７７５万ぐらいの入館者数がありますが、来年の４月、遅くとも６月には８００万人を突破する見込みであります。そういったこともございますので、今回の「あさ、ひる、ばん　博物館を楽しもう！２」をやってみたいなという思いでございます。

それと、地域再発見ということで、参加型の移動博物館の展開を挙げてございます。現在移動博物館用キットの作成をいたしております。これは、年内あるいは年度内、その作成期間を要すると思っておりまして、完成したものを来年度以降どういうふうにして移動博物館たるやということで整理していくのか、展開していくのかといったところを今年中に詰めていきたいというふうに考えております。これは滋賀県内だけではなくて、下流部分も含めてこういった移動博物館を展開し、琵琶湖博物館を知っていただき、お越しいただく機会をつくっていきたいと思っております。

それに対しまして、もう一個の柱は、ご議論いただきたい展示交流空間の再構築、いわゆるリニューアルであります。そのためには、開館１５年たったわけでございますけれども、その研究成果、蓄積を糧に利用されやすい博物館、世代間交流のできる博物館、琵琶湖の新たな魅力を発信できる博物館としまして、テーマは「水といのち」、こういった形が想定されますけども、展示交流空間を再構築していくというふうに考えております。

それが、展示内容の本格的更新でございますけども、今までの蓄積を具現化していく。またプラスアルファがやっぱり要るであろうということで、今回議論していただくネタといいますか、話題としてここに挙げておるのですが、例えば琵琶湖の生き物たちの世界を拡大して展示していくミクロの水族館というようなものを新たにつくってはどうかとか、三世代が楽しめる「こどもと大人のディスカバリー」みたいなこともつくっては

どうか。これは例えばの話でございますけども、こういったプラスアルファを議論してまいりたいというふうに思っています。

つきましては、そのスケジュールであります。これは県当局の予算関係もこれからでございますので、あくまでも見込みでございますけども、ことしは、チームも立ち上げておりまして、基本構想的な骨格部分についての議論を始めておりますけども、来年度はビジョンの策定ができるかなと。それに当たっては、市民参加による場を設けて、意見を聴きつつできればなと考えております。そして、２５年度以降基本設計、実施設計へと移りまして、２７～２８年度ごろには、施設整備、いわゆる工事着手ができ、２８年度の早期には７月か６月か、そのあたりはわかりませんけれども、リニューアル・オープンにこぎ着けられるかなというのが今の考え方でございます。

これはあくまでも私どものたたき台でございますけれども、要は、５年後にリニューアルできないかという方向性を持っておりまして、それについて皆さん方の自由なご意見をいただければと思います。

以上でございます。

○西会長：どうもありがとうございました。

それでは、ただいま説明のありました展示の新規更新といいますか、新琵琶湖博物館の創造という案について、それから、先ほどご説明があったことも含めて、皆さんからご意見を伺いたいと思います。

どなたからでも結構ですが、ございませんか。

はい。

○村井委員：確認です。展示交流空間といったときには、現状の常設展示、全部含めてですか。

○事務局（兼房副館長）：イメージとしましては、今の常設展示にかかるものでございます。

○村井委員：水族も含めてですか。

○事務局（兼房副館長）：水族も対象になりますけれども、やはり限界があろうかと思います。

基本的には新たな建物をどこかにつくるというイメージではなくて、現在の建物の中でというような、現在のところはそういうイメージでおります。

○村井委員：館の内部で、今の展示テーマの設定がありますが、それは崩さないと考えてらっしゃるんですか。それとも、これまでの成果の中から、何か新しいテーマ構成を考えていこうとなさっているのかを確認しないと、どういう話を出していいのか判断できません。

○篠原館長：それは、ここに書いていましたように、新たな展示のコンセプトはまだできていないんです。ですから、これから考えようとする前に、我々がその前の議論で、いつの段階でやるかはわかりませんけれども、そういうのができ上がった段階でまたお諮りすることになるだろうと思います、いろいろ。

要するにリニューアル一般に関して、いろんな情勢なり見解なり、考えておかなくてはならないことがあるかどうかということで今回出したのであって、どう考えるところから行くのかということを考えるわけですよ。そこを出しているということですから、まだ何もわかってないです。ただ、今の建物の中でということだけは考えているということです。それぐらいしかないです、まだ。

○村井委員：そんなことないですよね。

○篠原館長：正直言って、本当にそうですよ。

○西会長：はい、どうぞ。

○吉井委員：今のディスカッションではなくて、私の個人的見解かもわからないけれども、ここは湖と人間という大きなテーマで来ていて、湖イコール琵琶湖だと思うんですが、じゃ、車に乗って、またはバスに乗ってここに来たときに、琵琶湖を体験として感じるかというと、あんまり感じないんですね。

駐車場からここへ入って、バーチャルなものはあるんだけど、実際に琵琶湖の水をさわれるかといったら、湖岸まで行かないとだめだし、展示しているものも琵琶湖の展示はあるんだけど、体験学習と書いてあるんだけども、本当の体験じゃないんですね。せっかく琵琶湖のほとりにあるにもかかわらず、琵琶湖は見られない。

そうすると、ちょっと考えたんですが、例えばレインフォレス(熱帯雨林)の樹間の回廊、コリドーみたいなのがよくあると思うんですけど、ここだったら湖上のキャノピーみたいなものがあって琵琶湖の上を歩けるとか、あ、琵琶湖なんだと。そうすると、四季折々を感じられるから、４回来ていただけるかもわかんないと思いますね。

だから、琵琶湖とのつながりを見せるというとき、わざわざ展示にしちゃうと、一回

見たらこれでいいやとなっちゃうんだけども、季節の変化によって微妙に違うとか、写真を撮りたい人だったら、毎回来たいとかというのを思わせるような展示のあり方までもうちょっと広げられたほうがいいんではないのかなという感じを持ちました。せっかくここにある理由が、今のままだと見えない。別に草津の駅前にあったって構わない感じがするのです。というのを感じました。

○西会長：今、具体的な非常にいいお話じゃないかと思うんですけども、多分、村井さんが求めておられたのは、そういうことも含めて、方向性が何かということだったと思うんです。

館長が言われるみたいに、基本構想についてのフリーディスカッションが今日だと思って、どういうふうにするとか何もなしに、フリーディスカッションの中には、ちょっとここに挙がっていますけども、例として具体的な何か展示物があるとかという話もあるでしょうし、今、吉井委員が言われたみたいな、琵琶湖といいながら、ここへ来たら琵琶湖は見えないと。もっとやったほうがいいんじゃないかというような提案もある。あるいは、今言われたみたいに、ここを利用されて、あるいは話を聞いていて、こんなところは変えたほうがいいんじゃないかという形でもいいと思います。

まあ、今日はフリーディスカッションということで、琵琶湖博物館を大きく５年後に変えると。その中には展示も入るということで、お話しいただくということでいかがですか。

○村井委員：十何年か前にもっと大胆に水中が見られるようになったらいいなという意見を述べたことがありましたが、それは環境を壊してしまうから、そういう工事はできないということを言われてしまったことがあったのを記憶しています。つくりものの生態を見るのではなくて、やはり本物を知りたい。すぐそばに琵琶湖があるわけですから、何らかの接点をうまくつくり出していく工夫を考えていかれるのがいいのではないかなと思います。

あと、「地域だれでも・どこでも博物館」というイメージを、博物館の中だけでつくりあげていくのは難しいので、イメージしやすい活動を野外でやっている、その姿もほかの来館者が見ることができるというのがいいのではないかなと思います。

○西会長：ありがとうございました。

皆さん、自由に発言していただいたらいいので、よろしいですね、館長。

○篠原館長：ええ。村井さん、何かお疑いになっているようですけど、本当に、何か決まっているということではないんです。ですから、我々はいろんな情報を得て、考えていく素材にしたいということで、一番初めのディスカッションをしていただければ結構ですということなんですね。

これから、我々のほうの委員会をつくったりして、いろいろやっていかなくちゃならないので、その考える素材をいただきたいということがあります。最終的に反映できるかどうかは、お金の問題も出てきますので難しいということもありますけれども、最大限努力はしたいということです。

○西会長：いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

○津屋委員：展示のことと交流機能の充実というところが、また直接展示等の機能の部分だと思うんですけど、前に外にあった環境学習センターが琵琶湖博物館の中に入って、前よりも環境学習センターの見え方がちょっと埋没しているような感じは、外から見受けられます。

その動きと別個に、今日も廣畑さんが来られていますけど、企業の環境への取り組みということで、生涯学習だけで千社以上のいわゆる企業協定をして、その中でも環境に取り組んでいる企業は物すごくたくさんあるんです。けど、県の教育委員会の生涯学習課では環境に関して助言できる専門家が常駐していないので、企業の皆さんは、このプログラムでいいのだろうかと常に悩みつつ自学自習しながら、アドバイスを求めつつも、専門的なアドバイスを受けられないという状況に思います。

前の会議で、廣畑さんが、琵琶湖博物館の委員に、パナソニックから出ていただくようにお願いをいただいたことをとても喜んでいらっしゃって、琵琶湖博物館といえば環境に関する専門家がいるということと、企業の環境学習の地域貢献の取り組みがもっとつながっていくというように思います。

もしできるならば、琵琶湖博物館が滋賀県の新しい環境学習のセンターとして、コーディネーションもされたり、アドバイスもしたり、そういった機能になっていくと、学校だけでなく、これまで見えなかった企業さんとか、大学とか環境の取り組みをしている団体さん、教授や先生方がもっとつながっていくと思いますし、それはすごく必要ではないかなと思います。

そこで教育委員会の考え方をもっと大きな視点で変えて、過去の県の環境学習センターのイメージを完全に壊して、新しい琵琶湖博物館を拠点とした新しいセンターになってほしいなと思うんですけど、廣畑さん、どうですか。

○廣畑氏：おっしゃるとおりです。

○西会長：何か一言、今のことに関して。

○廣畑氏：今のことに関して以外でもいいですか。

○西会長：そうじゃなくても結構です。

○廣畑氏：確かに、環境学習ということでいろいろ取り組まれている企業というのは、県内でもたくさんあり、有名な企業もありますし、中小の企業さんででも本当にたくさん取り組まれているところがあります。そういった企業と連携ができるものが、博物館として果たしてあるのか、ないのか。そういったところから、まずスタートされるのが一番いいのだろうと思います。

県の方ですとか、この博物館と関わりがある程度深い方でない以外には、知られていないのが、琵琶湖博物館の役割なんですね。一般の方のある程度は、琵琶湖博物館という名前はご存じなんですね。でも、それは、琵琶湖博物館イコール博物館なんです。琵琶湖博物館が、実は国内でも有数の研究機関だということは全然知られていないんですね。そういうところは、もっともっと知らしめていくことが、新琵琶湖博物館創造のこのキーポイントになるのだろうなというふうに思っています。

そういう意味で、津屋さんがおっしゃっていましたけど、いろんな企業ともっとコンタクトがとれるようなことを考えて、タッグを組めるところは、どんどんタッグを組んでいくということが、博物館自体の活性化につながっていくだろうと思いますし、また、自分たちが望まなくても、つながった先が、琵琶湖博物館の宣伝をしてくれることになりますので、も集客力も違った面から、もっと高めることができるんじゃないかなというのを感じます。

○西会長：どうもありがとうございます。

○村井委員：今、図書館では、ビジネス関係の相談窓口に力を入れているところが増えてきています。個人じゃなくて、会社とか企業を起こそうとしている、そういう人たちに対するサポートに力を入れています。博物館にもそういう姿勢が必要だと思います。会社に対しても個人に対しても、まずは何でも相談してくださいと門戸を開いた上で、次

に一緒に研究や普及活動などを進めていく。例えば、「はしかけ」とか「フィールドレポーター」の法人版もあってもいいんだと広げていくことも、新しい試みではないかと思います。

○西会長：そういう窓口をまずつくって、やっていくのがいいだろうという話ですね。ありがとうございます。

ほかには、いかがでしょうか。

○吉井委員：確認したいのですが、今ディスカッションしている根拠は、これに基づいてとすると、「現状と課題」というのは、入館者数が減っているということしか書いてないんですが、これでいいのかどうか。

先ほども言われたように、たくさん経験があるんですが、例えばＪＩＣＡなんかがこちらにサポートを求めてこられて、楠岡さんの近いところで私も参加しているんですが、海外の国立研究所また博物館が、わざわざこの地方自治体の中の博物館に研修に来るという、これ一つとってみても、いかにすばらしいか。

それだけのものがある中で、入館者の減少だけとらえて、増やしたいんだと、余りにもチープすぎるんじゃないか。「新琵琶湖博物館の創造」というテーマにするのであれば、入館者数だけではなくて、新しい価値の創造みたいな、ということを、ここに入れたほうがいいんじゃないかと思います。

○村井委員：賛成。入館者数だけで、琵琶湖博物館の独自性を示していくのは難しいと思うので、独自性を改めてＰＲしていくことができるような指標を組み立てるべきだと思います。

○西会長：入館者数だけではないというところで、先ほどのご報告でも入館者数の経年変化はずっとあるんですけども、例えば研究活動について経年変化はないんですよね。そうすると、コメントのしようがないんです。

科研費を幾らとったといっても、去年と比べてどうなんだ。その前と比べてもどうなんだとか、資料のつくり方でも、博物館のいろんな面を経年変化で示していただけると、もっとコメントしやすいんじゃないかという気がします。

はい、どうぞ。

○青木委員：私も一つの施設を預かっている立場で、その入館者数が減るということはプレッシャーというか、気になる要因ではあるんですけれども、一方で、世の中の動きと

いうか、自然に対する動きがどうなっているのかというところが非常に気になるんです。

最近、私のところの傾向を見ていると、おっしゃるようにだんだん自然減で、同じような割合で減ってきているのは当然のことで、それはしようがないなと一方で思いながら、イベントを１年間で６０回ほどやるんですけども、実は来年３月までほとんどというか、定員の約２倍のキャンセル待ちなんです。

要するに、イベントで年間どう頑張っても、私とこだったら２,０００人しか集められないんです。でも、その倍の４,０００人の需要があるということで、実は６,０００人ぐらいの人が、わずか２,０００人のところに集中している。それが増えてきて、自然に対する要望というか、欲求というか、願いのようなものを非常に感じるんです。その受け皿は、どこかできちんととってやらないと、その人たちが満足できる場が提供できていない。要するに、そういう場所がまだまだ必要だと思うんです。

今、おっしゃっている入館者が減って、これに対してリニューアルするとか、充実をさせるというのは守りの展開のようで、これは私のところの施設の問題もあって、どうするかということが１年半後に起こるんですけども、規模を倍にするとか、これは県の予算から見てむちゃくちゃな話かもしれないけども、逆に言うと、もっと攻めていく。

例えば、今ある展示は必要なものだと私は思うし、ある程度は少しずつ手直ししながら使っていく。だけども、まだ足らないもの、今言ったフィールドに対する欲求というのは一部では非常に高まっていると思うんですね。そういう人たちに対する要望とか、それからもっとフィールドに出て研究をする部分もたくさんあると思います。

やっぱりもっと攻めていくような、さっきおっしゃっている議論と、僕の思いは一緒なんですね。さらに機能を充実させて、今までにないものをつくり上げていくような、そういう発想もあってもいいのかなと。今日は好きなことを言わせていただけるということなんで、とりあえず思ったことを話しさせていただきました。

○西会長：どうもありがとうございます。

長東委員、いかがですか。

○長東委員：今おっしゃったように、人口も減っているとかで少子化というのもあるので、その数では判断できないと思うんです。

でも、やっぱり真新しいものを見たいとか、興味があるというのもあるんですけど、以前に水族館のほうに行ったときに、チョウザメに餌をあげるというのがありましたね。

そういうのをもっと見たいし、すごく楽しいなと思ったので、そういう部分も、もうちょっと宣伝みたいな感じをされてもいいんじゃないかなと。

○西会長：その餌をやるところをごらんになった、あるいは自分でやられたんですか。

○長束委員：見たほう。

○西会長：見たと。餌をやる時間なんかをちゃんと決めておいて、案内して、ここへ行ったら。

○長束委員：できれば、あげることも。

○西会長：少し参加ができるようだというようなこと。はい、ありがとうございます。

伴委員、いかがですか。

○伴委員：僕なんか割と頭がかたいので、博物館というのはカビ臭くていいんじゃないかと思っているんです。地域の動植物がすべてここに来ればわかる。すべての標本がそろっていると。私、ここに選ばれたときに最初に申し上げたんですけど、そういう博物館でいいんじゃないかと思うわけです。

だから、フリーディスカッションというと非常に困りますね。話はどんどんこうやって拡散しちゃうわけだし、何を目標にしているかというのが一番重要で、先ほどから皆さんがおっしゃっているように入館者数を減らさなくするのか、あるいは収益目標を置くのか。そうじゃなくて、もっとエンターテインメントを増強するのか。そうじゃなくて、本来の博物館の機能を強化するのか、そういう目標みたいなのが欲しいですよね。そうじゃないと、議論が集約されていかないんじゃないかと思うんです。

○村井委員：ここに「地域だれでも・どこでも博物館」と示されていますが。

○伴委員：これは余りにも抽象的すぎて、私が申し上げたのはもっと具体的な目標設定みたいなものが欲しいなと思うんですよ。そうじゃないと、実のある議論にならないんじゃないかと思うんです。

だから、最初に村井委員がおっしゃったように、来年度の目標は何かとか、そういうものがわかっていないと、今年度の結果というのは評価できないわけですね。ですから、ここまでやるぞというのが欲しいですね。

○西会長：なかなか議論が集約していかないんですけども――はい、どうぞ。

○西川副会長：お伺いしたいのは、入館者のことが問題になっていますけど、皆さんは何か自信を失っているんですか。そんなことないでしょう、これだけの実績をちゃんと上

げているのですから。そこのところはちゃんと胸を張って、それでさっきどなたかおっしゃったみたいに、攻めというか、今度新しくこういうことをするんだというような、そういう方向にばっとやっていただきたいと思うんですよね。

入館者が減っているのを何とかしなきゃいけないと、それだったら、例えば、お示しいただいた統計、入場者内訳分析では団体入場者数がずっと減っているのが主要な要因らしいので、そうだとすれば、団体入場を増やせば、何とかなるわけです。要は、余り入館者のことにとらわれずに、これまでやってきたことに絶対自信を持って、何か思い切ったことを進めていただければいいんじゃないかと。それだけですね、私が申しあげるのは。

○篠原館長：それは、自信が全くないわけではなくて、自信過剰になるといけないと思って控え目に出したということですよ。それで、委員会は４月以降に新しく発足して、体制も新しくなりました。この中のメンバーも、用田さんと高橋さんとグライガーさんが上席総括学芸員専任になり、今度、総括学芸員に新しくなった者が部長になったということもありまして、できたばかりなんですね。

だから、目標を変えてしまって、例えば野外博物館的な要素をもっと増やすとか、そういうことを言ってしまえば、それで方向は決まっちゃうわけですけども、今それを議論しているわけですから、これから始めると。正直なこと言って、本当にここまでしかまだ、これは入館者数と書いておけば、それは大体いいんじゃないのかという程度のことであって、どういう方向を目指すのかということを議論したいわけで、そのときに、いろんなことが今言われていますよね。

今の中だって、わんさとある中で、片一方はフィールド野外博物館のほうをもう少し増やしたらいい。片一方は地味な博物館でそのまま行けばいい。どっちなんですかと。どっちが要するに我々として考えたらいいかということを考えることとして、やらなくちゃいけない。言うなれば、協議会の中だっていろんな意見があるんじゃないかと思うんですよね。それをまず聴いてみたいということがあったということで、正直なこと言って、別に自信がないわけじゃないんですよ。

今、本当に出発したとこなんで、その時点にたまたまこの協議会があったということだけなんですね。だから、ちょっと聴いてみようかということでお出ししたということです。最低限、入館者が減っていることを深刻に考えたりしているわけでなく、もうち

ょっとずうずうしいことを考えたかもしれないけど、これから考えるかもしれません。だけど、本当に出発したところで、体制も少し変わった。どうしようかというとこなんですね。

私として言えば、非常に正直に出していると思っているんです。

○西会長：はい。

では、山本委員、ちょっと中座されましたけども、いかがですか。

○山本委員：細かいことで申しわけないけども、自分の特性を生かしたことを言わせてもらいます。どのような方向性とか、いろんなことはどっちでもいいですわ。ただ、内部のものを変えるに当たっても、フィールドを外へ持っていくにしても、「どこでも、だれでもが楽しめる博物館」にされるという言葉があったんですけども、障害者が排除されないようなバリアフリーであり、ユニバーサルデザインであるというのは、それを一番望みます。

その中で、車いすだけではなく、視覚障害者、聴覚障害者の方でも、いつでも、どんなときでも来られるように、ナイトミュージアムをやられたときでも電車、バスがとれないとか、そういう交通手段がとれなかったこともあったんです。先ほど現場でも言わしてもらいましたけど、細かいところが、やっぱり当事者でないとわからない部分があるので、スケジュール見込に書いてある市民参加というのがありましたけども、そういう当事者の方の意見を幅広く取り上げてもらったほうが、万能な博物館になっていってほしいので、そういうふうにしてもらいたいというのを、意見として述べさせていただきたいと思っています。

○西会長：どうもありがとうございます。

ここにちゃんと、「だれでも、どこでも」と書いてありますので、「だれでも」というところをきちっと実現していただきたいと。

○山本委員：ごめんなさい。もう一つ言いたかったのは、今の状態で、箱という躯体を変えることは大きな予算が要るので無理だと思うんですけども、細かいことで言うと、入るところからスロープがあって下っていって、帰ってこようと思ったら、またスロープがあって、すごく大変なんです。

僕ぐらいの者では何となく行けるんですけど、もっと状態の厳しい者もおれば、余りにも動線が大変である。まず、入口のスロープを登るのは何の意味があるかよくわから

んけど、ああいうふうな動線がすごくつらい方もおられるので、あれが必要なものかよくわからないんです。

動力を使ってもらうのは申しわけないけども、エレベーターとか、動く歩道じゃないですけども、そういうものがあれば、厳しい状態の方、もしくはストレッチャーというか、ベッドみたいなものに乗っておられるような方でも行けると思うので、その辺も、現状でも疑問に思っている部分を言わせてもらいます。

○西会長：はい。

まだ少し時間がありますので、何を議論していいかわからんというところはありますけども、１５年経って全体的に見直していきたいというお話で、その中に、一つは入館者数が減っているということ、それから先ほどのお話では、琵琶湖博物館の特徴である交流の場が物理的に大変になってきているので、そういうことも解消したいというようなお話だったかと思うんです。

それ以外にも、いろんな機能を博物館が持っているかと思うんですけども、何かございますか。

○津屋委員：環境学習センターも学芸員さんも全部、奥の事務所に皆さんいらっしゃって、気軽にミーティングもしにくいというか、いつも緊張しています。なので、本当に交流する場ということであれば、もっと見えるところにお願いしたいです。

今日も、図書館のあの空間ならいいなと思ったんですけど、実は、ああいった余り使われていない、きれいなところがあるので、ああいうところにつないでいきますよというような、例えば環境学習センターは見せていくというような、そこで出会ったり、気軽に相談できたりというような、全部皆さんが中にいらっしゃるので、もし変えられるのであれば、出せるものは出していくというのが一つあるんじゃないかなと思いました。

さっき企業のことを言ったのは、子どもたち支援のプログラムを開発していらっしゃるので、体験プログラムという部分なんです。それをたくさん持っていらっしゃって、体験プログラムの学校支援メニューフェアをすると、企業さんだけでも６０団体ぐらいがどんと集まってくるんです。情報だけは生涯学習課が掴んでいるので、子どもへの体験プログラムを琵琶湖博物館で、企業のそういう体験を深めるようにできたらと思うのですが、それは難しいのでしょうか。

前の前の会議でしたか、体験プログラムのまとめをしていらっしゃる話を聞いたとき

に、同じ年齢で、同じ目標、いわゆる定員数が３０、中身は違うけれども、全部同じ年齢対象で、人数も同じと。そのときに、どうやってその情報を集めていますかと聴いたら、要は、ただ学芸員さんの情報を聞いてはめていったというお話だった。

それは、すごくもったいないと思って聞いた記憶があって、多分たくさんのプログラムメニューを構築したものを持っていらっしゃって、それは専門家が関わっているものなので、一ＮＰＯとか市民団体が頑張ってつくるものとは、やっぱりプロの方が関わっているのはすごいものがあるんですけど、今後こういった体験プログラムを大事にされるのであれば、もっと丁寧にきちっと発信すると、たくさんの方がそれを通じてつながっていくような気がするんです。とてももったいない。人材もすごいし、つくった人もすごいけど、中でコーディネーションがうまくいってないのかなというのは随所に感じるところです。

学芸員さんが研究もしながら、あれもしながら、これもしながら、それを複合的にやっているような現状でもあるのかなと思うので、こういったとこで人材も充実させるということであれば、教育普及的なポジションというのをちゃんと置いて、それが外で見られるような形になっていくような中での、そういう組織的なものも変えられないのかなと。

すみません。フリーのときしか言えないようなコメントですけど、中のコーディネーションがうまくいっていない感じは、ここずっと正直な感じで、教育普及のコーディネートを専属とする人や機能が必要なのかなと。学芸員さんの負担を増やすことではなくて、軽減し活かすというところも、この中に盛り込まれたらいいのかなというふうに感じます。

すみません、失礼な意見かもしれません。

○村井委員：環境学習センターというのは併設ですか、それとも合併しているんですか。

○事務局（兼房副館長）：この環境学習センターは既存にございます。一昨年までは環境学習センターが県庁内の環境政策課にありました。

○村井委員：それは知っているんです。ここに移ってきたときに、琵琶湖博物館と環境学習センターが併設されているような形で、２つの組織が存在しているということですか。

○兼房副館長：そうです。

○村井委員：これは、融合して活動していこうということは考えていらっしゃらないんで

すか。

○兼房副館長：今、現にそういうふうにやっております。

○村井委員：じゃ、そのセンターにはコーディネーターはいないのですか。

○事務局（兼房副館長）：おります。

○村井委員：環境学習センターの方は、今いらっしゃるんですか。

○事務局（兼房副館長）：環境学習センターは、交流グループが所管していますので。

○事務局（楠岡専門学芸員）：環境学習センターは、交流グループの一部として位置づけされております。交流のほうの学芸員には環境学習センターと兼務している者もおりますし、環境学習センターも交流事業に関わって、一緒に活動しているということです。

○村井委員：わかりました。

○西会長：大分と時間も過ぎておりまして――はい、どうぞ。

○吉井委員：私は、この提案でいいと思うんです。先ほどちょっと言ったように、タイトルを「価値の創造」ぐらいにして、今、生物多様性のあれがありましたので、琵琶湖博物館を多様化しないとだめだと思います。シングルの機能しかなかったら、来られる方は減少していって当然だと思う。

いろんな階層の、いろんな人に来ていただけるという意味で、多様性ということを考えたときに、もう１点、ローカルの組織の中にある限り、お金の問題というのは大きいと思うんですが、それの縛りは、頭の中で縛っていくしか動けないということを、いつも感じているんです。できないかもわからないお金もうけは、先ほど言われたように講師を派遣したら、そのお金をとってくるぐらいの可能性の調査がされているのかどうか。

要は、地方自治体の組織である限り、お金もうけを余り考えないというのが、今までの雰囲気なんですよ。琵琶湖博物館では、お金もうけを余り考えていないなと。だけど、こういう世の中では、可能性の検討ぐらいはしてもいいんじゃないか。どういうところで自分たちとしてお金が稼げるのか。または、何らかの価値を創造できるのか。

例えば、先ほど企業の話が出ましたが、企業サイドはスポンサーシップだけで寄付は出せると思うんです。そしたら、そのスポンサーシップを認めるのかどうかということの調査もされたほうがいいんじゃないかという気はちょっとしました。企業サイドは利益の問題があって、今、スポンサーシップを出しにくい状況にあるんだけども、そこにおいて信頼性を上げるという意味では、琵琶湖博物館はすごくいいパートナーだと思う

ので、そういうところの可能性も、多様性という中で検討されたらどうかと思います。

〇西川副会長：いいですか、話して。

そのご意見ですけど、全くそのおりだと思います。それで、情報というのは「ただ」だとみんな思っているんですね。学芸員の人が営々と積み重ねたものがあって、例えば、これは何ですかと言われたとき、「これ、何々の一種です」などと即座に答えられる。それは物すごい蓄積の結果なわけですが、聞く人はそれをただで聞く。本来、それはおかしいと思うんです。だから、その辺は情報の価値とか、積み上げられた知識の価値というのは正当に評価されるべきだと思うんです。

それとの関連で、好きなことを言わせていただくと、さっき伴先生がおっしゃったことで、中長期計画になりますけど、収蔵庫とか、そういう問題も博物館機能の基本ですから、そこのところを増やすのにこれだけのスペースが要るとか、お金が要るということはちゃんと言うべきだと思うんですね。余りにも社会貢献的な、あるいはサービス機能のほうにどうしても関心が行ってしまうんですけど、やっぱり博物館の一番基本の標本をきちんとするとか、それをちゃんと研究して後世に継承していくとかというのはちゃんとベースに置くという面では、そこをこういう案でもぜひ書いていただきたいと思います。

もう１つ、入館者数のことで言うと、「地域だれでも・どこでも」と言っているわけですから、例えばいろんなとこでも出前をやったり、ブランチでいろんなことをやっても、結局、それは入館者ということだと思うんですね。それを、ここの施設の入館者ということで数えてしまうと、自分自身の首を絞めているようなことにならないかと。だから、入館者という概念についても、もう少し考えてもいいんじゃないかと思います。

〇村井委員：利用者と表現したほうがいいと思います。

〇西川副会長：そうですね。

〇村井委員：私も、指標をもっと多様化するほうがいいと思ったんですが、西川先生がおっしゃったように、まずアウトリーチの回数、展示とか出張講座ですね。その出張講座も、学校だけじゃなくて、企業も対象にすればいいことだし、フィールドレポーターやはしかけさんの活動日数、これもすごく重要なことじゃないかと思います。それから、研究といったときに、学芸員だけじゃなくて、市民の研究数というのも琵琶湖博物館の場合には重要だと思います。ほかの施設では余りやっていないフィールドレポーターの

研究数というのは、ほかでは示せない、独自性をアピールできるものだと思います。

あとは、相談数とかあっせん数。学習指導要領でも、「知識基盤社会」の中で生きる力を養うという理念が重要と言われる今、インターネットなどの活用も子どもたちに一般化しているから、デジタルアーカイブにも力を入れていかなくちゃいけない。にもかかわらず、この２ページ目の「交流機能の拡充」には記載がない。琵琶湖博物館における交流機能の拡充は、イベントをやって人を呼べばいいでは決してないと思います。本気で「地域だれでも・どこでも博物館」の実現を目指すならば、やるべきことはもっとほかにある。そういうものを数値化した指標を示していくことが重要で、入館者数云々の話だけではない。それをきちんと示していかなければいけない。「琵琶湖博物館の創造」は、ハード部分のリニューアルだけで終わらせてしまうつもりなのか、と申し上げて終わりにしたいと思います。

○西会長：もう、すべてまとめてくださったんじゃないかと思います。

私もちょっと言いたいことがあったんですけども、お二人に言っていただいたような気がするんですが、最後に１つだけ。

琵琶湖博物館は、一番初めのときに博物館の木でしたか、やっぱりあれを原点にして考えていただけたらなというふうに思います。あの絵はすごくいい絵で、実は私が日博協の委員をしていて、ちょっと忘れましたけども、提言が出たときに博物館の機能をまとめた図として、あれを使おうと一人の委員が言ったことがあるんです。

それで、ほとんどの人が賛成したんですけども、日本博物館協会が、ある博物館が出している図をそのまま使うことはできないだろうということで、採用されなかった。それくらいあの図はいい図だと思いますので、あれを基本にされて、また皆さんで智恵を出して考えていただいたら、次はもう少し焦点が絞れるというか、会議ができるんじゃないかという気がいたします。

時間になりましたので、これで事務局のほうにお返ししたいと思います。

事務局のほう、何かございますでしょうか。

■　閉　会

○司会（兼房副館長）：長時間にわたりまして、本当にありがとうございました。

私どもの資料不足もございまして、少し言いわけをしたいところもございますけれど

も、実は、この協議会につきましてはできれば年２回ぐらいを開催させていただきたいなという思いがございまして、次回は２月か３月か、そのあたりにまたよろしくお願いしたいと思います。

きょうの会議につきましては、「新琵琶湖博物館の創造」以前に、中長期基本計画の中でどういうふうに取り組むのか。次はどうするのかというものがないと、この評価もなかなか難しいんじゃないかと思っております。ただ、私ども、このリニューアルに向けた取り組みが、ことしスタートしたばかりでございまして、真っ白な中で、これからどう展開するかを議論しつつある中でございます。

したがいまして、それで時間をとっていただいて、白紙の中で方向性がわからないのはいかがなものかというのがよくわかりましたけれども、何か題材をいただければなという思いでございます。

いずれ、この更新につきましては、たびたび当協議会のほうでご議論いただくことになろうと思います。その節は、ひとつよろしくお願いしたいのと、それから各指標の話が出てまいりました。今回ご提示させてもらいました資料なんかは十分に示してございませんけれども、お手元にお配りしています年報については年度ごとでございますから、その比較がなかなか難しいとおっしゃるのは、そのとおりでございます。

今後、会議を進めるに当たりましては、必要な指標について経年で比較できるような形で提出していきたいと思います。

本日は、長時間にわたりまして、ご意見を賜りましてありがとうございます。時間も参りましたので、このあたりで終わらせていただきます。

本当にありがとうございました。